# 委員会発足５周年を迎えて

社団法人 資源･素材学会
建設用原材料部門委員会
委員長　　山田　優

建設用原材料部門委員会は１９８８年に発足した。早くも５周年を迎え、今年４月の総会において、委員会設立準備の段階から会務の統括に尽力されてきた岩崎孝委員長と立松英信副委員長の辞任が認められ、かわって私と桑原隆司氏がそれぞれ委員長および副委員長に選出された。これを機に本委員会の経緯、現状を簡単に報告して、改めて委員各位の引き続きの積極的活動をお願いし、また新しい委員の加入も期待したい。

本委員会は資源・素材学会の活動の柱である部門委員会の１つで、建設用原材料の評価・利用技術等に関する調査研究ならびに情報交換を目的に設けられた。発足当時、様々な社会的要因も関係して、アルカリ骨材反応など、構成材料に起因するコンクリートの早期劣化現象が顕在化していた。従来からコンクリート用骨材としては主に岩石資源が用いられてきたが、限りあるこれら資源を有効に利用するための骨材の評価・利用技術の確立が急務であった。そこで次の３つを当面の研究課題に選び、研究者間の意見交換、討論の場としてワーキンググループを設置した。

（１）アルカリ骨材反応
（２）石灰石骨材を用いたコンクリートの耐久性
（３）廃棄物・副産物の骨材化

「アルカリ骨材反応」に関するワーキンググループは、立松英信委員（(財)鉄道総合技術研究所）がコーディネータで、コンクリート用骨材のアルカリ反応性の評価手法に関する調査研究を目的とする。ほかに石田良二（前田建設工業(株)）、宇野泰章（名古屋工業大学）、佐々木孝彦（(財)鉄道総合技術研究所）、永嶋正久（三菱マテリアル(株)）、森野奎二（愛知工業大学）の各委員が参画し、得られた成果は本誌に、また宇野委員による『粘土科学』などに発表された。

「石灰石骨材を用いたコンクリートの耐久性」に関するワーキンググループは、桑原隆司委員（清水建設(株)）がコーディネータで、骨材に石灰石を用いた場合のフレッシュコンクリートの性質、強度発現過程や中性化特性の把握を目的とする。小川敬三（日鉄鉱業(株)）、立松（前出）の各委員が参画した。この成果も本誌ならびに『セメント・コンクリート論文集』などに発表された。

「廃棄物・副産物の骨材化」に関するワーキンググループは、山田優委員（大阪市立大学）がコーディネータで、各種廃棄物・副産物の骨材化技術、つくられた骨材の評価に関する調査研究を目的とする。ほかに佐野正典（近畿大学）、原田道昭（(財)石炭技術研究所）の各委員が参画し、成果は本誌その他に発表された。

このうち「アルカリ骨材反応」と「石灰石骨材を用いたコンクリートの耐久性」については、さらに詳細な検討を加えたい事柄が残ってはいるものの、これまでの調査研究で当初の目的をほぼ達成できたので、今年度をもって解散したいとの両グループの意向である。

そこでそれらに替えて新しい課題を取り上げることができるが、昨今は酸性雨、地球温暖化などの地球環境問題、資源リサイクルなども加わって、建設用原材料に関連する研究課題は山積みされているといえる。現在、環境問題が世界的規模で取り上げられている中でコンクリートの耐久性を原材料の面からどうとらえるのか、有限の資源を有効に活用するために何をなすべきかなどに取り組んでみたいという意見があり、グループ編成の準備を始めている。そのほか本委員会にふさわしい研究課題の提案、ワーキンググループ活動への参加申出を期待する。

また本誌『建設用原材料』は、本委員会の研究成果のみならず、各方面の研究者による建設用原材料に関する成果の発表、情報交換の場であり、１９９１年３月の創刊以来、年２回定期的に発行され、今回で６号目となる。投稿いただいた各位および機関、ならびに編集を担当された委員に改めて感謝の意を表するとともに、建設用原材料関連分野の研究の横断的、総合的論文報告誌としてさらに発展させるため、関係各位のご協力をお願いする。

１９９３年９月